

# その28 泥町・三矢

(平成11年2月1日号—第199号)

京阪枚方公園駅周辺から、現在の三矢町の東端あたりにかけてが、今回ご紹介する「泥町[どろまち]・三矢」です。

泥町の名は旧『枚方市史』によると、淀川沿いの低湿地の泥田が町になったことに由来し、三矢の名は『大阪府全志』によると、この地に家屋が3軒しかなかったので、「三屋」とされたことに由来すると記述されています。

また、これらの2村は、江戸幕府を開いた徳川家康により、岡、岡新町とともに京街道の宿場町として、「枚方宿」と定められました。この「枚方宿」は、東海道筋でも指折りの大きな宿場町で、行き交う旅人たちで大変なにぎわいを見せていました。中でも三矢は、紀州や西国の大名が参勤交代中に滞在する本陣があり、宿場町の中心地的役割を果たしていました。

しかし、明治時代に入り、宿駅制が廃止されたことと、京阪電鉄が明治43年に開通し、これまでの淀川の舟運を中心とした交通体系から陸路を中心とした交通体系へと変遷したことなどにより、市の中心は、現在の京阪枚方市駅周辺へと移りました。その結果、「泥町・三矢」は次第ににぎわいを失い、それにつられるかのように、明治

期に泥町にあった枚方町役場(枚方市役所)も、三矢、岡(岡東町)へと移動し、昭和35年には、現在の大垣内町に建設されました。

また、泥町の地名も、時代の流れとともに、泥の字の持つ語感や飛び地が多かったため、行政上不便だという理由から、三矢町に合併され、消えてしまいました。

京阪枚方公園駅北口を出て西へしばらく進み、「歴史街道」の看板を見つければ、そこはもう、京街道「枚方宿」の西端、西見付です。「泥町・三矢」の往時をしのばせる町並みは、今も残っています。

徳川慶喜、坂本竜馬も駆け抜けたと言われる京街道。歴史ロマンを求めて、あなたも歩いてみませんか。



47 旧泥町(三矢町)



48 西見付(堤町)